

01

写真粒子とデジタルピクセルの共棲

Symbiosis of Film Grain and Digital Pixel

映像メディア学科・教授
Department of Visual Media・Professor

西宮 正明 Masaaki NISHIMIYA

今世紀に入り、現代社会は、特に情報産業は過激に走らざるを得なくなった。アナログからデジタルへの移行は、あらゆるハードを次々と生産し、競いながら、その盛衰を繰り返し、我々、そのユーザーは、そのメカニズムをマスターする前に、次の段階に進化した新しい道具を手渡されるという、落ち着きの無いゲームに参加せざるを得なくなっている。

明らかに、人間そのものであるアナログが、無機質なデジタルに追い廻され、深く、静かに思考する時間すら犠牲にせざるを得ないような環境を体験させられている。代表的な現象としては、放送もアナログ放送から、デジタル放送に大々的に移行する日を秒読みする環境に有る。

映像表現の基本とも考えられる、PHOTO、写真に例を取ってみよう。我々メディア映像作家は、新しい現代的表現と、そのコンビニエンスを求めて、1998年頃より、積極的にデジタルフォトグラフィーを研究し始め、実際の作品制作にも使用するようになった。

当初、我々が、デジタルに求めたものは、その軽妙小型な、携帯電話にまでもぐり込んだデジカメシステムではなく、その高精細な記録能力であり、よりシャープな再現性であった、使用機種はスキャナータイプの、一億五千四萬画素のフェーズワンであり、人物等に対応するには、ハッセルブラッドに取付けて、スピーディーに撮影出来る、超高価なCCDを搭載したBIG SHOT等であった。

画素数の膨大なフェーズワンは、一枚のスチールライフを撮影するのに、20分程の露出時間が必要であった。しかし、その大容量のデジタルデータから、大型に出力された、インクジェットの写真撮影映像は、未だ嘗て目にしたことのない、超シャープな、高精細な写真画像であった。しかし、その96、97年当時には、まだインクジェットの顔料インクは一般化されて居らず、屋外のような厳しい環境では、数ヶ月で退色するような、不安定なものであった。しかし、その時、既に写真が、近い日に、フィルムというアナログから、全てを記号に置換えて、瞬時に世界に流通するデジタルフォトシステムに移行するであろうことを、強く予感せざるを得なかった。

写真家的に反省すれば、銀塩写真に於ける大型フィルム、8”×10”（エイトバイテン）のフォトグラフィーを、超高精細なフェーズワン<フィンランド製>に求めていたのである。

その初期段階に於ける、私のデジタルフォトグラフィーへの理解と期待は多少、部分的な要素に注目していたと、反省している。当時、たった十年程前の近過去ではあるが、時の写真家どもは、皆、「アナログか、デジタルか。」という二元論に振り廻されていた。

或る写真家は頑なに、銀塩写真フィルムと、バライタ紙の印画紙の組み合わせを、永久不変な神具と考え、デジタルな写真、及び、その出力物を、軽薄なもの、として遠避けていた。

そのフィルム粒子か、デジタルのピクセルか、という大命題に、私自身が、或る結論を得たのは、次の実験結果によるものである。

私は、早い時期から、動画の編集にデジタルシステムを自然に組込んでいるので、デジタルの利便性を、CGを通してかなり認知していた。だから、自然に、ドキュメント系には、16m/mの映画フィルムを使用し、ハイクオリティな映像を求めるCM作品集には、パナフレックスカメラ、35m/mの映画フィルムという、所謂、フィルム撮影で原稿を作り、F.T<Film to Tape>の作業を経て、インフェルノ等の高度な編集作業を日常的なシステムとして採用して来ている。それ故に、私は、デジタルシステムの出発点から、今回のテーマである、写真粒子とピクセルの共棲を実践して来たことになる。

写真の世界がデジタルを迎え入れはじめたのは、動画、映画の世界より20年以上後の事であった、と記憶している。

上記の動画の世界の体験があったとしても、私が、今回の問題意識、銀塩粒子とピクセルの共棲、簡単に云えば、フィルムとデジタルのコラボレーションに強い意義を感じたのは、前にも触れたように、一つの実験結果によるものであった。

「フィルムは、何という膨大な情報量を秘めていることよ」

「たった一枚の小さな35m/mのネガフィルムの中に、こんなシャープな映像と感性を内蔵していたことになる」等々。

私は、その実験により、過去の35m/mのフィルム撮影、D-76等によるフィルム現像、そして、かなり正しく調整された引伸機による引伸し作業、それらの慎重なオリジナルプリント作業を通して発見出来なかった、一枚のネガフィルムの潜在能力を、そのプロセスにより心に強く刻み込むことが出来たのである。

大型ビューカメラにセットされた、一億五千四萬画素のCCDによる、気の遠くなるような時間を要するスキャニング作用を経て、B全大に引伸された、シャープな35m/mフィルムによる、スチールライブは、予てより体験して来た、35m/mフィルムからの多くの秀でた引伸印画よりも、よりシャープで、よりディティールに富み、より写真的であるのに驚いた。

その一瞬のインパクトが、今回の私の主張である、銀塩粒子<フィルム>とピクセルの共棲の命題を、私の世代の一員としての仕事として、決定づけたと云っても過言ではないのである。

その頃、私がリーダーを務めていた写真家の協会の新年会で、経済産業省の秀でた官僚のT氏が、我々写真家に質問して来た。「フィルムはいつまで存在しますかね」。ビルゲーツとも取引の或る日本最新のフォトプロダクションのS氏は、「もうすでに現

場では、ほとんどが、デジタルですから、フィルムはすぐにも消滅するでしょう」と云った。

私は、その逆に、「数量的にはほとんどがデジタルに移行しているという現象は明らかな事実ですが、ファインアートのフォトの分野等で、これまで以上に、フィルムの銀塩粒子は高く評価されて、その歴史的な、アーカイバルな意味も含めて、かなり永い間、デジタルとフィルムの共存の時代は続くと考えられます」と答えていた。官僚も、同意見であるという表情を私に送って来た。その意向もまた、前記の実験による、フィルムの驚くべき能力の発見によるものであったことは明らかである。1999年の一月であったと記憶している。

私の研究室からの新たな提案作品に就いて

写真の粒子は美しい”

“銀塩写真の粒子は美しい”

“PIXEL LOVES FILM GRAIN”

“ピクセルが、写真粒子に恋をした。”

私の今進行中の研究発表展のヘッドラインは、上記のようコピーで語ることが出来るのかも知れない。

昨年度<2008>年の研究論文でも触れたが、私は1962年以来、写真粒子の美しさ、特に、粗粒子による写真表現をグラフィックエレメントとして、度々採用して来た。今回<2009>年も超微粒子な写真映像の美しさ、心地よいグラデーションをモノクロームのトーンで語る、モノクロプリント特有の格調高いモノクロ写真等、多々有るフィルムの銀塩写真の魅力の中で、私は、再び、高感度で現像された、極限に近いフィルムの粒状性を、長年の自己表現の美学として、今回も追求することに決めた。

<心地良く荒れたフィルムの粒子>

ここ2、30年程のフィルム産業の傾向は、高感度フィルムの開発にも慣れ、高感度でありながら、コマーシャルの要求にも答えられる、高感度ながら、粒状性にも秀でた、特性曲線の緩やかなフィルム創りを志向するようになった。フィルム現像の現場から云えば極度に増感しても、中々荒れて来ない程、良質になっているという現況なのである。

そのために、我々は諸々なフィルムを、様々な方法で大增感するテストから開始した。使用フィルムの選択は、日頃から長年使い慣れた、フジとコダックの両社より選び、諸々の増感方法を、フィルムの特性曲線を考慮しながら実験を重ねて行った、途中、両社の研究室の協力を得て、粒状の形態を比較するために、電子顕微鏡の映像の提供も得た。

結論として、意外な展開の一つとして、シャープなモノクロ映像の粒子を得るのに、モノクロネガフィルムよりも、高感度に特殊現像を行った、カラーポジフィルムの粒状の方が結果として、私の求めるものに近かったことを、実験中のドキュメントとして記しておく。

私の試行は、飽くまで、科学実験ではなく、表現上のイメージの問題であり、日常的に、多くの写真家が、実用の可能な現像システムの範囲内での大增感現像を基本として来た。

結果としては、どの高感度フィルムを使用しても、秀でた粒状性を求めて生産された高品質なフィルムであるために、なかなか、荒れて来ないのが、逆に不満であった。結果、ISO3200では物足りず、ISO6400に極限的なアンバランスを求めて、大增感し、ほぼ満足の出来る、粗粒子を得ることが出来た。

粒子とピクセル <Grain and Pixel>

ここに於いて、今回の研究論文の前提条件が出揃ったことになる。現況の写真界では、アナログであるフィルム主体の写真表現が、デジタル写真に急速に移行しようとしている。その中で、我々写真家は、そのままフィルムの魅力と決別することを好しとは結論出来ない。特に私は、長年、写真粒子の、特に粗粒子に大增感した時の、強い魅力的なテイストを捨てることは出来ない。

そこに於いて、私は二つの写真的行為を試みた。その一つは、従来通り、アナログ写真のルールに従って、前記の方法で大增感されたフィルムを、精度の高い引伸機で、バライタ系の印画紙にオリジナルプリントする作業である。これは、一つの伝統的に行われて来た、写真的正統であり、我々にとっては、慣れ親しんで来た、あたりまえな行為であり、一つの基本のアーカイブでもあるのだ。

次に、その同一のネガ、又はPOSIを高精細にスキャンする行為であり、そこに於いて、今回のテーマである、粒子とピクセルのコラボレーションがスタートすることになる。アナログの銀塩粒子は、その次点で、ピクセルという記号に置き換えられ、全てが別の形をした、不安定な、いかにもアナログ的な粒子の姿を、全てが均一な、細かい正方形の集団に委ねることになったのだ。しかし、私は、その行為により、一つの銀塩粒子が、多数の正確無比なピクセル群により、かなり正確な形で、その形状を配列し、フィーリングまでが、パトタッチされている結果に驚いた。又、そのデータと呼ばれる、目に見えないピクセル集団を、顔料インクでプリントすると、35m/mのフォト原稿が、28倍強のB全版に引伸された場合にも、その映像はいかにも銀塩粒子さながらに、シャープに、テースティーに写真粒子の魅力を再現して見せた。ピクセルが、銀塩粒子になり切って、フィルム撮影のフォトを大き

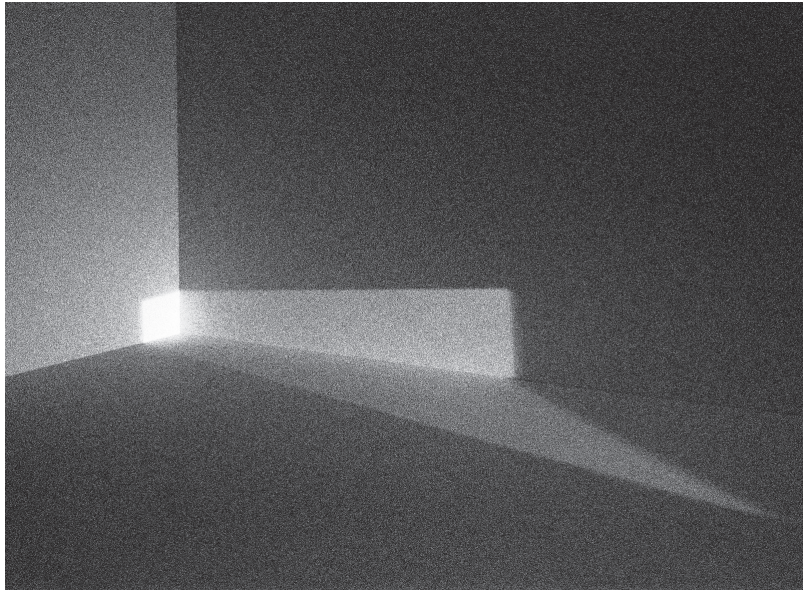
く粒子再現してくれたと私は感じる事が出来たのだ。私は、このフィルムとデジタルの複合とを今後の粒子とピクセルの共棲の原動力であると信じている。

キャッチフレーズ風に云えば、「ピクセルが、銀塩粒子に恋をした」-PIXEL LOVES FILM GRAIN-とでも云うことになるのではないだろうか。

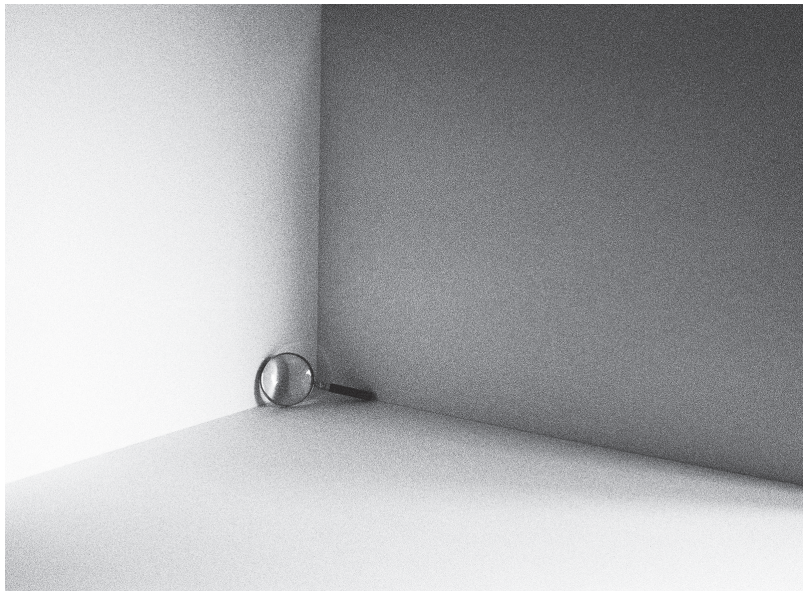
次の段階としての私の研究論文は、TEXTではなく、実際のプリント作品により、銀塩粒子の美しさを、シンプルな、諸々の写真的表現で、具現化して見せ、銀塩粒子の言葉を、ピクセルに語らせて、テーマである、写真粒子とピクセルの共棲を表現し続けたいと行動を起こすことにした。

追記

写真感材メーカーには、一日も長くフィルムの生命を生産し続けてもらいたいものである。



[fig.01] 2008



[fig.02] 2008



[fig.03] 2008



[fig.04] 2008

